

高校向け「新たなせんきょ体験授業」検討PT

第1回会議 要点録

日時 令和3年9月14日（火）18時～19時45分
場所 札幌市役所本庁舎4階 札幌市選挙管理委員会会議室
出席者 青塚委員、高橋委員、渡邊委員、柳野委員、佐藤委員（座長）、
宮腰委員（オブザーバー委員）、元紺谷委員（オブザーバー委員）

1 開会及び自己紹介

佐藤座長から開会宣言と主催者挨拶があった後、出席者による自己紹介が行われた。

2 検討目的とスケジュール

資料2に基づき検討目的を確認した上で、資料3により今年度末までのスケジュールを確認した。

3 プログラム骨子（たたき台）について

はじめに、資料4に基づき、手稲高校、龍谷高校及び清田高校における主催者教育の取組について情報共有を行った。

次に、各校の取組事例を参考に事務局が作成したプログラム骨子（資料5）に基づき、事前に提示した五つの論点について意見交換を行った結果、次のとおりとなった。

ア 題材とする選挙公報について（論点①）

まずは、過去の国政選挙の比例代表の選挙公表を題材とすることとし、体験授業実践校の先生の感触や生徒の反応を見ながら次の展開を検討する。

ただ、選挙公報を題材として生徒同士で議論又は意見交換をさせるという点では、政治的中立性確保との兼ね合いでデリケートな問題も孕んでおり、学校によっては消極的になるところもあり得る。その解決策の一つとして、学校の状況やリクエストに応じて、体験授業を柔軟に組み立てたり、幾つかのメニューの中から体験授業を選択したりするようにすることも考えられる。

イ 投票の動機付けについて（論点②）

立候補者が当選するために、有権者数が多くて、投票率も高い高齢者を意識して政策を訴える結果として、高齢者などの声が強く反映されやすい民主主義（シルバー民主主義）が展開されがちになることも。こうした実情を踏まえ、若者の有権者数を増やすことは容易にはできなくとも、投票率を上げることはできるのではないかとこの投げ掛けをする方向で講義資料を作成する。

ただし、シルバー民主主義という言葉の受け止めが人によって異なるものであり、それ自体に否定的な要素も含み、世代間対立を生じさせる懸念もある言葉なので、慎重にかつ客観的に表現していくことが必要。

ウ グループワークの在り方について（論点③）

早稲田大学マニフェスト研究所作成の政党公約・政策比較一覧表を活用し、グループワークにおいて、一人ひとり自分の関心のある政策テーマを一つ選び、それを選んだ理由も合わせてグループ内で発表し合うに当たって、例えばSDGsなど、学校が力を入れたいと思うテーマについては司会者である選管側から理由も含めて提示し、生徒に共通の理解を促すとともに、グループ内での意見交換のきっかけづくりを行うことを検討する。

また、社会問題への関心の度合いも生徒によって様々である中、どの学校でも実践可能な汎用性ある取組とするために、グループ内に大学生ボランティアなどのファシリテーターがいなくとも、「こんなことを言っているのかな」と発言を躊躇する生徒を後押しし、ハードルを下げてあげる工夫を司会者が行うことも検討する。

政治的中立性を確保するためにも、グループワークにおいて、政策議論や政党比較ではなく、社会問題にどんな関心があるかをグループの中で話すという事は良い選択。グループ発表を取り入れることについては、今後、実践を積み、経験を蓄積してからの将来課題。

エ 投票先決定のハードルを下げることに（論点④）

全ての政策テーマについて政党比較しなければならないと考える生徒もいれば、その逆の生徒まで幅広くいる中で、生徒一人ひとりの状況に応じた司会者や先生からの適切な助言を受け、生徒が「これぐらいでもいいんだ」「それならやってみようか」と思って投票先を決めていくプロセス自体が、生徒自身の投票先決定のハードルを下げることに繋がる。

なお、選挙には必ず任期があって、選んだあとも有権者がチェックしていく期間があり、もしも自分が「前は失敗したかな」と思っても、次の選挙の際にまた選び直せばいいと、授業を通じて生徒に伝えることも検討する。

オ 振り返りに（論点⑤）

リアル選挙の結果を提示する際、全年齢の投票傾向と年代別の投票傾向を示してズレを「見える化」することで、若年層の投票の意義を感じてもらうことを検討。

生徒の投票行動実態把握のためにも、ビフォー・アフター用紙には「政党名」だけでなく、「白票」と「棄権」という選択肢も敢えて用意し、「白票」と「棄権」を是とするわけではないが、授業の中でその意味の違いも生徒に伝えることを検討する。

なお、生徒が投票先を選ぶ際にどの政策テーマを大事だと捉えたか把握するため、アンケートに、「投票する際に一番大事だと思った争点は何か」という設問を追加。

4 モデル校の想定について

立候補により清田高校をモデル校として、今年12月から来年1月までの間を念頭に置きながら、2時限のプログラムを実践することに決定。

規模については、学校のカリキュラムとマッチする形で、学年単位でもクラス単位でも可。

5 閉会